

感情コミュニケーションの社会学と現代社会(5)

内 田 司

要 旨

現代社会における私たちの生活様式の諸特質の一つは、理性と感情が対立させられ、理性だけが重視され、感情（生活）の重要性が等閑視されてきたということである。というのも、私たちが生活している現代の市場経済社会では、私たちは、最小費用による最大の利潤追求、そのことを可能にする最適化と効率化、そして計算可能性という、近代合理性の経済化された生活原理が至上原理となった社会生活に、否応なしに適応しなければならなかったからである。こうした市場経済社会における経済様式化された社会生活の中では、私たちは否応なく自分以外の外的世界と、自己の私的（経済的）利益を実現するために、損得感情（勘定）にもとづいて、手段的・道具的にかかわらざるをえない。その中では、理性＝知性とされ、私的目的実現の手段として重視されるが、感情はそうした合理的な活動を攪乱する非合理的なやっかいものとして従属的な地位に押し込められてきた。しかし、こうした感情生活を抑圧する社会生活は、諸個人の精神生活だけでなく、対人関係、対社会的関係行為にもさまざまな問題を引き起こしている。連載からなる本稿は、かかる現代社会における諸個人の感情生活の非合理的な存在様式によって引き起こされている、諸個人の精神生活、人間関係、社会との関係にかかわる諸問題を、感情コミュニケーションの視点から分析することを目的としている。本稿の課題は、現代社会における社会変動と社会生活諸領域の分節化について検討することである。

キーワード：感情コミュニケーション、共感、損得感情（勘定）、疑心暗鬼のコミュニケーション、傲慢とルサンチマン、愛

目 次

序 問題の所在

第一章 社会・生産と生活の社会的諸組織・人間関係・諸個人の精神生活と行動・行為

第二章 理性と感情に関する理論（79号）

第三章 感情コミュニケーションの理論（80号）

第四章 現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型（81号・82号）

第五章 現代社会の社会変動と社会関係の変容、諸個人の精神生活の諸問題

第1節 現代社会における社会変動と社会類型

第2節 現代社会における生活諸領域の分節化と生活諸領域間の関係様式（本号）

第3節 現代社会における消費の場における生活・社会関係・個人の精神生活

第4節 現代社会における労働の場における生活・社会関係・個人の精神生活

第5節 現代社会における教育の場における生活・社会関係・個人の精神生活

第6節 現代社会における家庭という場における生活・社会関係・個人の精神生活
 結語 「共感」に基礎をおいた感情コミュニケーションが豊かに発展する社会のあり方を
 求めて

第五章 現代社会の社会変動と社会関係の変容、諸個人の精神生活の諸問題

第1節 現代社会における社会変動と社会類型

前章までの感情コミュニケーションについての検討を踏まえ、いよいよ現代日本社会における私たち諸個人の日常生活場面における、個人にとっても社会にとっても問題を孕んでいると思われる精神生活様式およびその精神生活様式から生み出される、同じく個人にとっても社会にとっても問題を孕んでいると思われる行動・行為様式を検討することが、本章の課題である。そのためにも、社会と個人との関係を問という社会学の基本視点の枠組みの中で、私たち諸個人の問題を孕んでいると思われる精神生活を、本稿では、どのような諸仮説の下で検討していこうとするのかについて明らかにしておきたい。

本稿では、すでに第二章で、人間の精神生活、すなわち「人間の心」に関して、進化心理学の知見から学びながら、次のように定義していた。繰り返すことになるが、あらためて全文を再記載することにした。すなわち、「人間の心」とは、人間の長い進化の過程で形成されてきた外的世界の認知装置であり、人間行動・行為の動機付け装置および制御装置なのである。人間諸個人は、この心の装置の機能によって、自己をとりまく外的環境が、自己に危害を与えるものか、それとも自己の生命活動（生活）を支え、促進してくれるものであるかどうかを認知するとともに、その認知にもとづいて自己の生命活動（生活）の中で直面する諸課題を達成するための行動・行為を生産しているのである。「人間の心」は、それゆえ、人間諸個人の目的に応じて、その目的を実現するための行動・行為の戦略・戦術を生み出すための演算装置と行動・行為を引き起こす動機付け装置を備えている。さらに、「人間の心」は、人間諸個人が、自己が建てた目的とそれを実現するための戦略・戦術に沿って自分は行動・行為しているかを自己で見守り、監視する自己の行動・行為の制御装置も備えている。また、そうした「人間の心」の働き、別言すれば人間の心的過程は、脳の生理的過程をはじめとするさまざまな人間の生理的過程によって支えられ、それらの生理的過程と相互作用している。

以上が、進化心理学の見地から見た、人間の精神生活に関する定義であるが、では、この精神生活が問題状況を呈するというを、同じく進化心理学はどのように考えているのであろうか。スティーブンスとプライスによる『進化論的精神医学入門』によれば、それは、以下のように考えられていた。すなわち、両氏によれば、私たち人間の精神生活の健康は、人間の長い進化の過程で形づくられてきた心の原形的な諸欲求（archetypal goals）が満たされることによって維持される。そして、私たち人間の精神生活の健康が損なわれた結果生じる精神病理

は、私たち人間の心の原形的な諸欲求が満たされないことから起こる。その精神病理の精神医学的諸症状とは、決して私たち人間の本性からはずれたところから起こってくるものではなく、私たち人間の、外的環境への心理・生理学的応答の諸活動が誇張され姿をとったもので、精神生活の中に持続的に現れてくるものなのであると。さらに、両氏が行っているここでの問題にたいするもう一つの重要な指摘は、人間の精神病理を引き起こすのは、単に、人間の成長発達初期の時期の諸欲求不満とそれらによるトラウマに限られたものではないというものである。両氏によれば、人間諸個人の全生涯における任意の時期に経験する心の原形の欲求不満が私たちの精神病理の原因となりえる可能性をもっているのである⁽¹⁾。

こうした進化心理学の知見から学び、私たちの日常生活中で起こってくる諸個人の問題を孕んだ精神生活や社会的行動・行為を対象として社会学的研究を行おうするとき、まず、「心の原形」をどのようにとらえるのか、そしてその「心の原形」の諸欲求不満の主要因をどのように仮定するのかという、その研究のための諸前提が明らかにされておかなければならないであろう。前者に関して言えば、すでに感情コミュニケーションについて検討したときに言及している山極寿一氏の「原始の心」が参考になろう。これも繰り返しとなるが、山極氏自身のことばをここでも引用しておくならば、とくに社会的動物としての人間の社会性に関する「原始の心」とは、「対等性を好み、他者に同調していこうという共同性と、(血縁と生後の親密なつきあい関係という)二つの親しさ」⁽²⁾〔()内は引用者による〕という心である。また、感情コミュニケーションの立場から言えば、この社会性に関わる「原始の心」は、共感に基礎をおいた感情コミュニケーションによってその健康が維持されるということであろう。

では、そうした「心の原型」の諸欲求不満の主要因をどのように仮定するかということに関しては、本研究では、それを、現代社会における社会的諸規範や生活様式への過剰な適応行動・行為(による燃え尽きを含む)およびその行動・行為の挫折と仮定している。さらに、人間関係・社会関係論から「心の原型」の諸欲求不満の主要因を言えば、競争的、支配・抑圧的、そして無関心的人間関係・社会関係を、著者は重視している。同じく、感情コミュニケーション論的に言えば、これもすでに前章で検討してきたものであるが、損得感情(勘定)のコミュニケーション、疑心暗鬼のコミュニケーション、そして傲慢とルサンチマンのコミュニケーションを、著者は重視している。

そうした前提と仮定の下で、現代社会における諸個人の、問題を孕んだ精神生活と行動・行為の社会学的検討を行うとことになるが、そのとき、感情コミュニケーションの社会学は、精神病理学が対象としているような精神生活の病理を研究対象とするわけではないということを、ここで、あらかじめ断っておかなければならないであろう。感情コミュニケーションの社会学が研究対象とする問題を孕んだ諸精神生活と諸行動・行為とは、外見的には正常な(病理的ではない)精神生活と社会生活をおくっている(ように見える)人たちの精神的自律と自立の未発達・解体化という問題およびその未発達・解体化から生じてくる問題を孕んだ諸精神生

活と諸行動・行為である。とくに、攻撃的、暴力的、そして社会からのひきこもりのそれらを、感情コミュニケーションの社会学は主要な研究対象とすることになろう。蛇足になるかも知れないが、さらに言えば、感情コミュニケーションの社会学は、それらの諸精神生活や諸行動・行為を社会のあり方（存在様式）から切り離して研究を進めるのではないということである。それは、そうした諸精神生活と諸行動と当該社会の社会構造および社会諸規範の存在様式とその性格との関係を探究することこそを、学的特徴としているのである。すなわち、感情コミュニケーションの社会学は、社会構造と社会諸規範の存在様式と性格 \longleftrightarrow 人間関係・感情コミュニケーションの存在様式と性格 \longleftrightarrow 問題を孕んだ諸精神生活・諸行動・行為というトリアーデの相互関連を明らかにしようとするであろう。

このような感情コミュニケーションの社会学の視角から社会諸科学の源流を辿って見ると、その最終的な課題は、平穏で平和な、そして相互親切と博愛に充ちた道徳に適った社会建設の、広い意味での社会的（経済的・政治的・社会的・文化的）諸条件を探究することにあつたということが想起される。すなわち、社会諸科学の源流は、道徳哲学であつたのである。そして、そうした社会建設にとって最も重視された諸条件の一つが、ほかでもないいわゆる「貧困問題」の解決であつた。そのことを最も意識的に追究したのが、近代経済学の祖と言われているアダム・スミス氏であることは周知のことである。スミス氏は、例えば、氏が生きていた当時、「下層階級」の人々を「怠惰な貧民」と見なし、それゆえ、高賃金は彼らをして遊惰においやる以外のなにものでもないとして、「低賃金の経済論」を説いていた重商主義の主張に反対し、次のような議論を展開していた。それは、「従属ほど人間を腐敗させるものはなく、それに反して独立は人びとの正直をさらに増進するのである。商工業の確立はこの独立をもたらすのであつて、犯罪を防止する最善の治政である」⁽³⁾というものであつた。

以上の引用文によってもわかるように、スミス氏にとっては、商工業を確立し、社会の経済的富を豊かにしていくことは、それ自体が自己目的であつたわけではない。商工業の確立と発展 \rightarrow 下層階級の人々の含めた社会のすべての人々の経済生活の独立の実現 \rightarrow 社会のすべての人々の正直の増進 \rightarrow 犯罪を防止する最善の治政の実現＝道徳に適った社会の実現というストーリーの物質的基礎として、スミス氏は、経済的富の増進を重視していたのである。そして、スミス氏は、経済的利益追求の自由、競争主義、そして分業とそれにもとづく協業による工場制生産様式の採用・推進に代表される、生産・労働における効率主義等の社会形成原理を純粹に体現している市場経済社会こそが、経済的富を増進させ、社会のメンバーの経済生活を豊かにし、経済生活における独立を実現することによって、人々の正直を増進させ、道徳に適った社会を実現することのできる社会であると考えたのである。

しかし、残念ながら、スミス氏以降の市場経済社会の歴史的展開過程は、氏が期待したストーリーの筋書きどおりに進行することはなかったのである。例えば、マクロレベルで見ても、21世紀に入った現代に至ってもなお、市場経済の社会形成原理を基礎とした商工業の展開は、グ

ローバル化の中で、確かに地球上全体の経済的富は増大させているのではあるが、それが人類社会の道德に適った社会の実現にはほど遠い状況を呈している。さらに言えば、それは、道德にかなった社会実現の歩みの途上にあると言うよりは、むしろ、逆行した歩みとなっているのではないかと思われるほどなのである。換言すれば、現代に至ってもなお、市場経済社会の歩みは、商工業の発展→経済生活の格差の拡大、経済生活の独立・自立はおろか、その実現をも脅かし、解体するような貧困の再生産→社会的利害対立や摩擦・紛争の増大→人々の精神的自律・自立の解体かとモラルハザードの増大→社会的、人間関係的摩擦・衝突の増大、すなわち戦争・紛争・（社会的・人間関係的摩擦・衝突から生じる）犯罪の拡大的再生産→道德にもとる社会状況のより一層の進行という、スミス氏の期待から言えば、負のスパイラルの状況に陥って、抜け出せなくなっていると言えるのである。こうした状況は、個々の国民社会においても、その現れ方に相当の違いが見られるにしても、本質的なところでは変わらずに存在していると言えるのではなかろうか。

しかも、現在のマネーゲーム的市場経済のグローバル化によってそうした負のスパイラルは、アメリカ、ヨーロッパ諸国、そして日本などの先進諸国と言われている国々においてさえ、より拡大・強化された形で進行しているのである。なぜならば、マネーゲーム的市場経済の特徴は、第一に、どのような市場経済のあり方と比較してもより一層、経済的利益追求を至上の価値としている。しかも、徹底した競争の自由を市場価値としている経済システムであるということになる。その第二の特徴は、マネー市場は、原理的には、どのように活況的な取引が行われるにしても、それ自体から経済的価値を生産し、豊かにするものではない（マネーゲームというのは、その性格として、投資先を見つけることができず、余剰となった利潤が、より有利な金利を求めて世界を駆けめぐり、余剰利潤のパイの分捕り合戦を行うゲームである）がゆえに、ある一握りの人たちの莫大な利益は、他方に膨大な数の人々の経済生活の不利益と破綻を生み出さざるをえないということである。その第三の特徴は、そうした経済生活上の不利益や破綻は、マネーゲームに参加した参加者のうちの負け組の人たちだけでなく、マネーゲームの余波に否応なく巻き込まれる人々の中で膨大に生まれるということである。これは、マネーゲーム的市場経済の下では、他者の生活欲求を満足させ、社会全体の富を豊かにし、経済生活を改善してはじめて、自己の経済的利益をあげることができるという、古典的な商品生産にもとづく市場経済の原理とモラルが崩壊してしまっていることを意味している。すなわち、それは、他者の不幸を踏み台として経済的利益をあげるというモラルハザード社会の出現を意味している。その第四の特徴は、単に階級的搾取という原理だけでなく原理によって、経済生活に格差がより拡大されて広がっていき、社会的亀裂を生産・再生産していくということである。このことは、先進諸国においてさえ、古典的な貧困問題を大量に生産・再生産し、そうした貧困問題から生じる社会的軋轢・摩擦・犯罪を多数生じさせるということの意味するであろう。

こうした社会状況を最も典型的に示しているのがマネーゲーム至上主義社会アメリカである

う。銃の乱射による無差別殺人事件の多発や児童虐待、ドメスティックバイオレンスの多発など、暴力という感情の暴発が、じわじわと、社会を蝕んでいるアメリカ社会の状況を、ニコラス・レグシュ氏は、「血まみれの文化」と呼んで、その状況を次のように描写している。レグシュ氏いわく、「社会のお偉方は、われわれの種は、社会制度のおかげでわれを忘れる状態に陥らずにすむように進化したと主張している。このような信念が行きすぎなのは、地球上のどこでも人間は強いストレスにさらされれば、抑制を失う可能性があることを無視している」⁽⁴⁾。「文明という薄っぺらな見せかけの下には、強力な動物的エネルギーが潜んでいて、コントロールがきかなくなることがある。われわれはまだ、社会の安定が、普通なら暴力を全開する可能性を抑えてくれる、強力な接着剤だという考え方に慣れていない。環境が悪化し、社会構造が人々の分裂を癒す能力を失うにつれて、暴力を解き放つ可能性が高まっていく」⁽⁵⁾のであると。

レグシュ氏はさらに議論を進める。「一見安定している先進国でも、富める者と貧しい者の格差は拡大している。その結果として、貧困、失業、そして疎外されて不満を募らせた男女を生み出す基盤も広がっている。豊かな国は恵まれた中に貧困層という“孤立した集団”を抱えているだけだという見方は、よくある誤りだ。たとえば、アメリカでの生活をもっと現実的に評価すれば、職につくチャンスと、ヘルスケアをはじめとする適切な社会支援を受ける機会を奪われた、これら“孤立した集団”は、われわれとは異なるもう一つの文化を築き上げて、単に生き残るために日々争いに明け暮れる暴力の土壌となっている。こうした人々の“文化”が広まってしまったために、われわれはすでに代償を払っている。彼らの荒っぽい麻薬取引は、地球でもっとも裕福でもっとも強力な国家に社会不安を引き起こしているのである」⁽⁶⁾と。

「さらに、先進国の多くで、貧しい子どもの数が増えている。アメリカには中でもっとも貧しい子どもたちがいる。カナダでは、子どもたちの二〇パーセント—およそ百四十万人—が貧しく、その数は十年前と比べておよそ五十万人増えている。こうした子どもたちは、病気や事故、暴力的行動にさらされる危険性が高い。彼らも大人たち同様に、生き延びるためには才覚（“犯罪”の別名）を使わなければならないと思ひ込んで」⁽⁷⁾〔傍点による強調および（ ）内は原文による。以下断りのない限り、それらは原文による。〕いても不思議はないのである。さらに、国内だけでなく国際関係的に見ても、富める国（者）と貧しい国（者）との格差のより拡大された形での進行の下で、「先進国は、貧しい国々の危機によってさらに不安定になるかもしれない。その一例として、社会批評の権威であるロバート・カプランは、『アトランティック・マンズリー（The Atlantic Monthly）』の中で、西アフリカで行った調査に基づいて、発展途上国は環境崩壊の瀬戸際にあり、再生可能な資源が急速に不足している結果、先進国にも無秩序が広まらうと結論している。土地や水などの資源をめぐる競争は、これからも社会に広く葛藤をもたらし続けるのだから、そうした事態も十分ありえると、彼は述べている」⁽⁸⁾のである。現在の国際社会では、テロもまた頻発していると言えよう。これらの、国内外の状況は、まさしく、レグシュ氏の言うように、暴力を絶えることなく産みだしつづける社会的土壌

であろう。

翻って、こうした視点から見ると、日本社会の現状はどのように見えるであろうか。結論から言えば、残念ながら、日本社会も、また、富める者と貧しい者の格差が拡大し、まだアメリカ社会ほどではないにしても、貧しい者の中には経済生活が破綻し、貧困問題に苦しんでいる人たちが増大しつつあると言えよう。それは、日本社会も、また、マネーゲーム的市場経済社会の流れに巻き込まれているというだけでなく、国家そのものが、そうしたマネーゲーム的市場経済社会に即応する社会改革の政策を、意識的に、しかも急ピッチで押し進めているからである。その政策のモットーこそが、利潤（利益）追求主義、効率主義、そして競争主義、いわゆる市場原理主義の三点セットの主義の意識的政策化を意味する「規制緩和」と、そうした社会形成原理の下で敗者になり、経済生活が破綻した者たちの生活は、もはや社会や国家が支えとなることを放棄することを宣言する「自己責任」というものである。そうした中、日本社会も、また、確実にレグシュ氏が論じていた暴力を生み出す社会的土壌を拡大させていると言っても過言ではないのである。

しかし、ここで、簡単にはあるが、アメリカや日本の社会で現在進行している社会のあり方は、人々の意志や努力によってはどうしようもない、自然的運命であり、市場経済のあり方についての唯一の選択肢というようなものではないということについて言及しておきたい。マネーゲーム的市場経済のグローバル化の下でも、アメリカや日本とは異なった型の（市場経済）社会形成の方向に舵切りを行い、むしろマネーゲーム的市場経済の原理の下で生み出されてくる影の部分に抵抗し、克服しようとする社会建設を進めようとしている国々が存在すると言うのである。21世紀の入口に立った20世紀末、さまざまな報道機関で21世紀の人類の社会像を探究しようとする特集が組まれた。ここでは、その中から、（マネーゲーム的）市場経済の光と影を明らかにし、21世紀の「世界システムの行方」を考えようとした朝日新聞の特集記事を取りあげてみよう。

その特集記事、「世界システムの行方」の②では、欧州の基本理念をめぐって、「社会的欧州（ユーロップ・ソシアル）」か「自由主義的欧州（ユーロップ・リベラル）」かの選択をめぐっての対立軸が存在していること、そして多くの欧州諸国では、「競争より連帯重視」の「社会的欧州」を選択する動きとなっていることを伝えている。すなわち、当時の「欧州の選挙では社会民主勢力の伸長が著しく、欧州連合（EU）十五カ国で社民党系が政権に加わっている国は十二カ国にも達する。財政難でかつての高福祉・高負担路線は維持できなくなってきたが、それでも市場万能でない道を見いだそうとする諸国民の意思の表れのようなだ」⁽⁹⁾と。また同記事には、電通総研の日・米・英・フランス・ドイツ・スウェーデン6カ国における「目指すべき社会像」についての調査結果が紹介されている。「目指すべき社会像」についての選択肢は、「貧富の差の少ない平等社会」、「意欲や能力に応じた自由競争社会」、そして「どちらともいえない」の3つである。

この電通総研の調査結果はというと、「フランスとドイツは『貧富の差の少ない平等社会』への支持が半数に達し、『意欲や能力に応じた自由競争社会』をめざすとしたのは二―三割。一方、英国と米国は『自由競争社会』をめざすという回答が六―七割を占め、『平等社会』は一―二割にとどまった」⁽¹⁰⁾。スウェーデンは、「平等社会」という回答は、約41%、「自由競争社会」は、約23%であった。また、「どちらともいえない」が約34%を占めていた。日本はというと、最も割合が高かった回答は、「どちらともいえない」で、42%であり、国民のレベルでは、調査時点では、「平等社会」をめざすべきか、または「自由競争社会」をめざすべきかについて決めかねていることがうかがえる。しかし、この時点では、「平等社会」をめざすという回答が「自由競争社会」をめざすという回答を上回っており、それぞれの割合は、前者が約36%、後者が約22%であった⁽¹¹⁾。ただし、日本の場合は、国家政策の基本方向は、「自由競争社会」をめざすという方向で動いており、アメリカ型社会への道を歩んでいると言ってよいであろう。国家政策のレベルでも「平等社会」をめざした社会建設を進めている国や社会ではどのような社会状態にあるのか、「自由競争社会」をめざしているアメリカ、イギリス、日本などの国々のそれと比較するなかで（どちらの型の社会に住んでいる人々が幸せと感ぜられるような生活をおくっているのか）明らかにされる必要があるであろう。

以上の簡単な考察からもわかるように、市場経済社会と言ってもそれは決してアメリカ型の社会だけを意味するものではないのである。そのことは、アメリカ型社会をめざしている日本に住んでいる私たちが意識しておかなければならないことであろう。ただ、本稿では、日常生活において暴力的感情を暴発させてしまう社会的条件として第一にあげなければならないのはいわゆる「貧困問題」ではあるが、そのことに焦点をあてるわけではない。本稿では、日常生活において暴力的感情を暴発させやすいその他の社会的諸条件に焦点をあて、考察を進めることになる。日常生活における諸個人の感情および暴力的感情を暴発させやすい社会的・個人的諸条件として、社会のグローバル化に伴う社会の複雑化と分節化の増大と社会変化の急速化・急激化に伴う新旧諸規範の併存などによる、諸個人のあずかりしらぬ諸規範やルール、また矛盾・対立する諸規範への過剰適応、または適応への失敗・挫折をあげることができよう。また、効率性、計算可能性、スピード、そして活動性と競争主義が優先される現代社会における社会生活の中、自分の肉体的・精神的生理に適合しない諸規範やルール、そして生活様式への過剰適応、または適応への失敗・挫折をあげることができよう。

さらに、そうした現代の社会生活における諸個人の感情および暴力的感情を暴発させるような圧力（ストレス）をかける社会的諸関係・人間的諸関係様式の影響力の増大をあげることができると思われる。そうした社会的諸関係・人間的諸関係様式とは、以下の三つの形をとって存在しているものと思われる。その一つは、自己の感情をだれにも受け止めてもらえないという、感情コミュニケーション上における「社会的孤立」という形である。二つ目は、支配・被支配的關係における他者による感情抑圧、コントロール、およびそうした関係への適応のた

めの感情の自己抑制・抑圧という形、そして三つ目は、自己の肉体的・精神的生理に適合しない諸規範・ルール・生活様式への過剰適応⁽¹²⁾とその失敗・挫折という形である⁽¹³⁾。本稿では、この社会的・個別的・個人的諸条件に焦点をあて、社会問題となるような諸個人の諸行為・行動がなぜ現代社会の社会生活の中で頻発するようになってきたのかを、それらの社会的・個別的・個人的諸条件との関わりにおいて、分析的に解明することをめざしたい。

その具体的な作業に入る前に、次に、簡単にでも、現代社会の社会生活様式の大きな特徴の一つである、社会生活領域の分節化（消費・労働・教育・家庭という諸個人の生活領域が、空間的にも、時間的にも、そしてそれぞれの生活領域の主要メンバー的にも、社会的に分化、自律・自立化し、それぞれ固有の性質を有した社会として形成されていくこと）とそれらの諸領域間の関係様式について、検討を加えておきたい。

第2節 現代社会における生活諸領域の分節化と生活諸領域間の関係様式

現代社会における社会生活様式の重要な特徴の一つは、諸個人の生活諸領域の分節化、およびそのことに伴うそれぞれの生活領域に関わる生活空間と時間の分節化であろう。そこで、まず、諸個人の生活諸領域の分化・自律・自立化、すなわち分節化に関する先行する議論を参照してみよう。

私たち人間の生活（生命）活動の基本、土台は私たちの生命そのものを維持するために営まれる経済生活であるが、それは、社会科学の諸分野では生産（労働）と消費との循環の過程としてとらえられてきた。浅野義光氏と後藤文治氏のことばを借りて表現すれば、「私たちの経済生活は、非常に複雑な仕組みで営まれているようですが、つきつめてみれば、生産（労働）と消費の繰り返しといえます。つまり、日々の暮らしの営みは、生活に必要なものを、自分で働いて自ら生産するか、または自分が生産の一部に参加してかせいだおカネで、他人の生産したものを買い取るかして手に入れ、一方では、それを自分または家族など他の人々の消費に充てています。このような関係を、個人の集まりであるいわゆる社会集団について、全体的にとりまとめて考えてみると、私たちの経済生活は、生産（労働）活動と消費活動とが不断に連続する循環の過程を通して営まれ、しかもその循環活動の中で互いに密接に結び付けられているということがわかります」⁽¹⁴⁾〔（ ）内は引用者による〕。このように、「私たちの経済生活の基本的仕組みは、どこでも、いつの時代でも、その根本は、生産（労働）と消費を両極とする循環活動の形をとっているもの」⁽¹⁵⁾〔（ ）内は引用者による〕なのである。そして、「そのような社会集団の規模が大きくなるに従って、または技術が進歩し、社会制度が発展するに伴って、生産（労働）と消費を結ぶ経済生活の仕組みは非常に複雑になってきます」⁽¹⁶⁾〔（ ）内は引用者による〕。

上記の引用文にある生産（労働）と消費を結ぶ経済生活の仕組みの複雑化は、生産者と生産手段および生活手段の分離、またそのことによる生産労働のための労働力の所有者と生産活動

のための資本、すなわち生産手段および生活手段の所有者の分化、独立化という歴史過程を契機として進展していく。マルクス氏は、この過程を、資本主義的生産様式に先行する「いわゆる本源的蓄積過程」と呼んでいた。マルクス氏によれば、近現代的市場経済社会、すなわち「資本主義社会の経済構造は封建社会の経済構造から生まれてきた。後者の解体が前者の諸要素を遊離させたのである」⁽¹⁷⁾。その内容とは、資本関係をつくりだす過程であるが、「労働者を自分の労働諸条件の所有から分離する過程、すなわち一方では社会の生活手段および生産手段を資本に転化し、他方では直接生産者を賃労働者に転化する過程以外のなにものでもありえない」⁽¹⁸⁾のであった。「したがって、いわゆる本源的蓄積は、生産者と生産手段との歴史的分離過程にほかならない」⁽¹⁹⁾のであった。

こうした歴史的過程を経た後の、とくに労働者たちの生産（労働）と消費という日常生活は、別の生活空間・時間で、別の社会メンバーの間で営まれる、それぞれ別の生活領域における生活というように変化していった。生産（労働）に従事する生活領域とは、その生活空間の側面から見れば、職場・工場・会社、企業等と呼ばれる社会である。これに対し、消費生活領域とは、これも生活空間という側面から見れば、生産（労働）によって稼いできたお金によって購買された生活諸手段を消費する場、すなわち（労働者たちの）家族社会（家庭・世帯として把握される場合もある）である。そして、これら二つの生活領域における生活は、ただ単に、生活の時空間およびメンバーが相違しているというだけでなく、また生活原理そのものも異なるものとして発展していった。

先にも参照した浅野義光氏と後藤文治氏によれば、国民所得の経済学的把握の視点からは、生産（労働）の生活領域を代表する企業と消費生活領域を代表する世帯（家計）とは、それぞれ国民社会の経済主体であり、企業は「極大利潤原理」に従って、そして世帯（家計）は「極大満足原理」に従って行動していると把握することができるのである⁽²⁰⁾。生産（労働）の生活領域と消費の生活領域における生活原理の違いを、生活者たちの視点から把握したのは、アダム・スミス氏であった。スミス氏によれば、労働とは、「人間生活の必需品・便益品および娯楽品」⁽²¹⁾を生産するための活動であるとともに、それらの品々の、市場における「交換価値の実質的尺度」⁽²²⁾でもある。そして、その労働する者にとっての性格は、骨折り、「労苦や煩勞である」⁽²³⁾。氏は、さらに、そうした労働のもつ性格を消費生活と比較する形で次のように敷衍している。氏いわく、あらゆる分業が徹底して行われ、生活手段を生産するための労働も資本家の下での商品生産のための賃金労働になると、「労働が多くついやされたり、すくなくついやされたりするのに、等しい労働は、労働者にとってはつねに等しい犠牲を意味するのである」⁽²⁴⁾。すなわち、「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である、といってさしつかえなからう。かれの健康・体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練および技巧が通常程度であれば、かれは自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならないのである。かれが支払う価格は、それとひ

きかえにかれがうけとる財貨の量がおよそどのようなものであろうとも、つねに同一であるにちがいない」⁽²⁵⁾と。

この引用文にあるように、スミス氏にとっては、労働とは、労働者が労働する時間に応じて、「自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄」⁽²⁶⁾することを意味する活動にほかならなかったのである。同じくスミス氏によれば、人間本来の生活活動は、労働から解放されたところで営まれる消費生活の一部である余暇活動の中にこそあるのであった。そして、その余暇活動の性格は、余暇活動を営む諸個人の自己完成であった。スミス氏いわく、余暇活動は、「人間の自由で寛大な、しかも生氣あふれる行動」⁽²⁷⁾（活動）という性質を有していると。ただ、そうした余暇活動を享受できるのは、決してすべての人々ではなく、氏のいう「多少とも身分や財産のある人」に限られるのではあるが。

これをスミス氏自身のことばで言えば、「多少とも身分や財産のある人々がその生涯の大部分を過ごす職業は、庶民のそれのように、単純なものでもなければ千編一律のものでもない。そのほとんどすべては、はなはだしく複雑で、手よりも頭を働かせるようなものである。こういう職業に従事している人々の理解力が、働かせかたのたりないために鈍くなることはめったにありえない。そればかりではなく、多少とも身分や財産のある人々の職業は、朝から夜までその人を苦しめるようなことはめったにない。かれは一般にたくさんの余暇をもっており、そのあいだに、かれは生涯のはじめの時期にその基礎をきずいておいたか、または多少とも愛好するようになったか、そのいずれかしたはずの、有用または装飾的な知識にあらゆる部門において、自己を完成させることができるのである」⁽²⁸⁾。

これらの人々に対し、「庶民のばあいには事情がちがう。かれらは教育のために割愛する時間をわずかしかもっていない。かれらの両親は、幼年時代においてさえ、かろうじてかれらを扶養しうるにすぎない。働けるようになるや否や、かれらは自分の生計費を稼得しうるような、なにかの職業に精ださなければならない。そのうえ、この職業も、一般にひじょうに単純で千編一律のものであるから、理解力を働かせることはほとんどないし、しかもそれと同時に、かれらの労働は実に間断なくつづき、またひじょうにきびしいものであるから、かれらにとっては、なにかほかのことに精だしたり、そうしようと考えたりする余暇さえほとんどなくなるし、ましてそういう志向などはなおさなくなるのである」⁽²⁹⁾。

マルクス氏は、上記のスミス氏の議論を受け、資本主義的生産様式の下における生産労働と消費生活について次のような議論を展開していた。マルクス氏によれば、まず、生産労働一般は、本来人間の本性にかなった生活活動であることを認識しておくことが重要なことなのであった。氏いわく、「生産的生活は、類的生活である。それは生活を生みだしてゆく生活である。生活活動のしかたのなかに、一つの種〔species〕の全性格、その類的性格がふくまれているのであって、自由な意識的な活動が人間の類的性格である」⁽³⁰⁾（下線による強調は引用者による）と。マルクス氏は、さらに次のようににつづける。「人間は、まさしく対象的世界の加

工形成のなかではじめて現実的に、一つの類的存在としての実を示す。この生産は人間が仕事に活動する類的生活である。この生産をつうじて自然は、人間のした仕事および人間の現実として現れる。したがって労働の対象は、人間の類的生活の対象化〔されたもの〕である。というのは、人間は自分を、意識のなかでのようにただ知的にだけでなく、仕事の活動で現実的に二重化するからであり、したがって、自分によって創造された世界のなかで自分自身をまのあたり見るからである」⁽³¹⁾と。

しかし、資本主義的生産様式における資本・賃労働関係の下で行われる生産労働は、労働者たちの肉体的生存のための単なる生活手段の活動として現れるものとなる。マルクス氏自身のことばで言えば、資本・賃労働関係の下では、「人間にとって労働、生活活動、生産的生活そのものが、ただ、ある要求の、つまり肉体的生存維持の要求の、充足のための手段として現れるにすぎ」⁽³²⁾なくなるのであった。氏は、そうした労働を「疎外された労働」と呼び、その性格を次のように展開していた。マルクス氏いわく、

「疎外された労働は人間から彼の生産の対象を奪い取ることによって、それは人間から彼の類的生活を、彼の現実的な類の対象性を奪い取るのであって、動物にたいする人間の長所を、彼の非有機的身体たる自然が彼から取り去られるという短所に転化する。

同様に、疎外された労働は、自己活動、自由な活動を、手段に引き下げるのだから、それは人間の類的生活を彼の肉体的生存の手段にしてしまう。

人間が彼の類についてもつ意識は、こうして疎外によって転化し、類的生活が彼にとって手段となるということになる。

こうして疎外された労働は、

(三) 人間の類的存在^{ヴェーゼン}を、自然をも彼の精神的な類的能力とともに、彼には疎遠なある存在^{ヴェーゼン}、彼の個人的生存の手段にしてしまう。それは人間から彼自身の身体を疎外する、ちょうどそれが、彼の外の自然、ならびに彼の精神的本質、彼の人間の本質（ヴェーゼン）を疎外するように。

(四) 人間が彼の労働の生産物から、彼の生活活動から、彼の類的存在から疎外されているということの、一つの直接的帰結は、人間からの人間の疎外である。もし人間が自分自身に対立しているなら、彼には他の人間が対立しているのである。人間が彼の労働にたいし、彼の労働の生産物にたいし、彼自身にたいする関係についてあてはまることは、人間が他の人間にたいし、また他の人間の労働とその対象とにたいする関係についてもあてはまる。一般に、人間から彼の類的存在が疎外されているという命題は、ある人間が他の人間から疎外され、また彼らの各々が人間的本質から疎外されている、ということなのである。

人間の疎外、一般に人間が自分自身にたいして立っているあらゆる関係は、人間が他の諸々の人間にたいして立っている関係のなかではじめて現実化されており、表現されるのである。

それゆえ、疎外された労働の関係のなかでは、各人間が他の人間を、おのれ自身が労働者と

しておかれるような関係と尺度とにしたがって、観察するのである」⁽³³⁾と。

以上のマルクス氏による疎外された労働論は、これまで多くの先学によって、しかも、論争的形で研究され、論じられてきた。いまさら、専門外の著者がそうした議論に、屋上屋を重ねる議論をする必要はないのかもしれない。ただ、現代社会における社会生活の生活様式である生活諸領域の分節化とそれぞれの生活諸領域における生活原理と社会関係の特質分析の予備的考察という範囲に限って、見るだけにとどめたい。まず、ここでは、疎外された労働論の中にでてくる人間の類的存在を、人間の生活活動の「自由な意識的活動」という性格と人間の生活活動における人間関係の共同的性格と理解しておきたい。類的存在のそうした理解によれば、疎外された労働とは、人間の生活活動におけるそうした性格が全く反対の性格に転化する、すなわち、「自由な意識的活動」が手段的で、強制された活動へと、そして、共同的人間関係が敵対的人間関係へと転化することを意味することになる。さらに、疎外された労働論とは、そうした人間活動の性格の転化と再生産のメカニズムに関する議論であり、労働者からの生産・生活諸手段の剥奪（その歴史的出発点は、資本の本源蓄積）→生活活動の手段化、強制の下での労働→労働者の肉体的、精神的生活の苦痛化と貧困化→労働生産物の所有権の移行（労働者から資本の所有者へ）→労働者と資本家という敵対関係の生産および資本家の生産・生活手段の独占的所有と労働者の無所有の生産→これ以降は、賃労働と資本関係という資本主義的生産様式の下での、疎外された労働の、社会的・循環的再生産化の社会的制度化という、国民経済学の事実の分析論と理解することができよう。

このように、資本主義的生産様式の下では、労働者の生産労働が「疎外された労働」という生活に転化したことに伴って、スミス氏によれば、「自由な意識的活動」の生活領域の可能性を孕んだ生活領域とされた消費生活の性格も、労働者のその場合はスミス氏の性格規定とは違った性格をもつものとなる。マルクス氏によれば、「疎外された労働」から解放された時空間の中で営まれる消費生活は、第一義的には、労働者の「疎外された労働」の中で酷使された肉体的・精神的消耗を癒し、そうした消耗から回復し、再度労働することができるように、その能力と意欲、エネルギーを取り戻すための生活として存在している。氏は、労働者の消費生活をそうした内実を前提として、「労働力の再生産過程」と名づけていた。その「労働力の再生産過程」は、「疎外された労働」によって得られた賃金によって実現されている。マルクス氏は、「疎外された労働」とは何か、それによって手にする賃金とは何か、そして賃金によって営まれる消費生活とは何かについて、『賃銀・価格および利潤』や『賃労働と資本』の中では、次のように論じていた。

「機械は運転されることによって消費または使用されるのと同じように、労働者の労働力は彼が働かされることによって消費または使用される。だから資本家は、労働者の労働力の一日分または一週間分の価値を支払うことによって、その労働力を一日中または一週間中にわたって使用または働かせる権利を得たのである」⁽³⁴⁾。「労働力の価値は、それを維持または再生産

するのに必要な労働の分量によって決定される」⁽³⁵⁾。

「だから、労働力は、その所有者である賃金労働者が資本に売一つの商品である。なぜ彼はそれを売のか？生きるためである。

しかし、労働力をはたらかせること、すなわち労働は、労働者自身の生命活動であり、彼自身の生命の発現である。そして、この生命活動を、彼は、必要な生活資料を手に入れるために、他の人間に売るのである。だから、彼の生命活動は、彼にとっては、生存するための手段にすぎないのである。彼は生きるためにはたらく。彼は労働を彼の生活のなかにさえふくめない。労働はむしろ彼の生活を犠牲にすることである。それは、彼が他の人間にせり売りした一つの商品である。したがって、彼の活動の生産物も、彼の活動の目的ではない。彼が自分自身のために生産するものは、彼の織る絹布でもなく、彼が鉱山から掘りだす金でもなく、彼のたてる邸宅でもない。自分自身のために生産するものは、賃金である。そして、絹布や金や邸宅は、彼にとっては、一定量の生活資料に、おそらくは一枚の木綿の上衣、幾枚かの銅貨、地下室の住居に、かわってしまう。そして、一二時間のあいだ、織ったり、つむいだり、鑿坑したり、挽いたり、家をたてたり、シャベルですくったり、石をわったり、運搬したりなどする労働者—この労働者は、この一二時間の機織り、紡績、鑿坑、挽き加工、建築、シャベル仕事、石割—を、彼の生命の発現と、彼の生活と、みとめているのであろうか？その逆である。生活は、彼にとっては、この活動のやむところで、食卓で、居酒屋の腰掛けで、寝床で、はじまるのである。これに反して、一二時間の労働は、彼にとって、機織り、紡績、鑿坑等としてはなんの意味をもまったくもたず、彼を食卓につかせ、居酒屋の腰掛けにかけさせ、寝床に横にならせるかせぎとして、意味をもっているのである」⁽³⁶⁾と。これら引用文中にある、労働力の再生産としての消費生活が営まれる場が家族であった。

ここで注意しなければならないことは、消費生活とは、ただ単に、労働者自身の労働力を再生産することだけを意味しているわけではないということである。マルクス氏によれば、消費とは、人間の消費生活の通歴史的性格として、ただ単にある諸欲求の充足だけを意味するものではなく、新たな諸欲求の生産をも意味するものだったのである。マルクス氏自身のことばによれば、「大事なことは……この最初の要求がみたされたこと自体が、要求をみたす行為とすでに手に入れている要求をみたすための道具とが、あたらしい諸要求へみちびくということである。そして、第一の歴史的行為といったのは、あたらしい諸要求のこうした産出のことなの」⁽³⁷⁾である。この人間による新しい諸要求の産出行為の現状を、市場経済社会の枠内の動向と言うことに限って言えば、現在の先進諸国では、消費水準があがり、ただ単に生きるためだけの消費生活は過去のものとなり、消費生活とは、最先端またはある社会的意味を有している消費文化の消費を意味するようになっていっているといわれている（そうした消費生活の特質については後に検討することになるであろう）。それに伴って、消費生活のための空間や時間が家族生活内における消費生活から分化・独立・自立化し、現在の社会生活における消費生活は、独自の生活領

域として立ち現れている。例えば、その生活空間の代表的なものが、都市におけるショッピング街、繁華街、またはセンター街などであるといえよう。

さらに、同じくマルクス氏によれば、労働と消費の分化・自立化という現代社会生活様式の下における消費生活は、上述してきた以外の重要な性格が存在しているという。それを一言で言えば、労働力の世代的・社会的再生産という性格である。このことを、マルクス氏は賃金とは何かを論じる中で次のように叙述していた。氏いわく、「われわれは今日、資本主義的生産の支配のもとに生活しているが、ここでは住民の大きな部分をしめ、しかもたえず増大していく一階級は、賃金とひきかえに生産手段—道具、機械、原料、生活資料—の所有者のためにはたらくときにだけ、生活することができる。この生産様式の基礎のうえでは、労働者の生産費は、彼に労働する能力をあたえ、彼の労働能力をたもち、そして老年や病気や死のために彼が去ったばあいには新しい労働者でこれを補充するために、つまり、労働者階級を必要な人数だけ繁殖させるために、平均的に必要な生活資料の総和—またはその貨幣価格—からなっている」⁽³⁸⁾と。

さらにマルクス氏は、賃金と労働力陶冶の必要性との関係にも言及しながら賃金とは何かについて、次のように論じていた。すなわち、「他の各商品の価値とおなじように、労働力の価値は、その生産に必要な労働の分量によって決定される。人間の労働力は、人間の生きた個体のうちにのみ存する。人間が成長し、その生命を維持するためには、一定量の必需品を消費しなければならぬ。ところが人間は、機械と同じように消耗してしまい、他の人間によって置換えられねばならない。人間は、自分自身の維持に要する必需品の分量のほかに、さらに、労働市場で自分にとって代って労働者種族を永續させるべき一定数の子供を育て上げるための必需品の分量を必要とする。その他、人間の労働力を発達させ一定の熟練を獲得するためには、さらに或分量の価値が費されねばならぬ。吾々の目的のためには、些細な教育および啓発費しか要しない平均労働だけを考察すれば充分である。だが、この機会をとらえて述べておかねばならぬのは、相異なる質の労働力を生産する費用は相異なるから、相異なる事業で使用される労働力の価値も相異なるに違いない、ということである。だから、賃銀の平等を要求する叫びは謬見に基づいているのであって、決して充たされえない気ちがいじみた願望」⁽³⁹⁾なのであると。ここの引用文にもあるように、労働力の世代的再生産には、労働力を陶冶するための教育や啓発の生活活動も含まれているのであった。

では、労働力の世代的再生産が社会的に行われる場合は、どこなのであろうか。それは、かつては、家族であったであろう。マルクス氏いわく、人間の「歴史的発展のうちに、それが始まると同時に、はいってきた第三の事態は、人間たちが—かれらはかれら自身の生活を日々更新するが—他の人間たちをつくりはじめる、すなわち繁殖しはじめる、ということである—男と女、夫と妻、両親と子どもたちの関係、家族」⁽⁴⁰⁾と。さらに、氏は、社会の発展と家族の進化の関係について次のように言及する。「この、最初のうち、唯一の社会的関係であった家族は、やがて増大した諸要求があたらしい社会的諸関係をうみだし、増大した人口があたらしい要求

をうみだすようになると、ひとつの従属的な社会的関係になる（ドイツをのぞいて）。そのときには、現にある経験的な諸材料にもとづいて—ドイツでよくなされるような《家族の概念》にもとづいてではなく、考察され、展開されねばならない⁽⁴¹⁾と。この最後のマルクス氏の指摘は重要であろう。この指摘に従うならば、さきに言及してきた労働力の世代的再生産における、とくに労働力を陶冶するための教育活動や啓発のための活動は、現代社会では、まさしく家族ではなく、そのための専門的社会機関＝学校において行われる活動ということになる。すなわち、現代社会では、人間たちによる他の人間たちの生産という生活活動が営まれる場合は、家族から分化・自立化した学校制度という新しい生活領域中に存在するようになっているのである。

以上の考察からもわかるように、現代社会における私たちの社会的な生活活動は、主として、消費生活領域、労働生活領域、（学校）教育生活領域、そして家族生活領域の4つの生活諸領域から成っているといえよう。では、これら4つの社会生活の諸領域は、どのような関係構造を有しているものなのであろうか。ダニエル・ベル氏は、氏の著書である『脱工業社会の到来』の中で、市場経済社会におけるその関係構造を理論化するための有益な議論を展開している。それゆえ、しばらくの間、氏のその議論に耳を傾けてみよう。その議論は、ベル氏が「工業社会」（以下本論では市場経済社会と読みかえ、そのように記述することにする）における生活様式を「経済化様式」（以下本論では経済化生活様式と記述）として展開している議論である。それによれば、市場経済社会は、「二種の『新しい人間』、技術者とエコノミスト」⁽⁴²⁾を主体にすえて、「一つのはっきり区別できる生活の様式を導入した。われわれはそれを《経済化》と呼ぶことができる。経済化とは競合する目的の間で乏しい資源を最もよく配分する科学である。それは『浪費』の削減のための必要不可欠の技術である—これは支配的な会計技術により規定されている計算法により計測されたものであるが、経済化のための条件は配分の仲介者としての市場のメカニズムと、需要と供給のパターンの移動に対応して動く流動的な価格体系である」⁽⁴³⁾。

また、経済化生活様式の原理を表現する用語とは、目的満足の「『最大化』(maximization) (手段の)『最適化』(optimization)『最小費用』—要約すれば合理性(rationality)概念の構成要素—である」⁽⁴⁴⁾〔(手段の)は引用者による〕。ただし、ベル氏によれば、「経済化様式の一つの理解のためには合理的な諸手段と目標の多元性の間の差異が強調されなければならない。近代工業社会（市場経済社会）は自由社会であり、その目標を定義する必要、もしくは一連の目標の中で優先順位を確立する必要、を感じたことはなかった」⁽⁴⁵⁾社会なのである。それゆえ、市場経済社会では、原理的には、社会が諸個人に対してこうすべきであると強制するような「生活の目標そのものはけっして与えられていない。それらは社会の構成員によって自由に選ばれるべき、多岐多様にわたるものとして考えられていた」⁽⁴⁶⁾のである。経済学は、ただ、そうして社会の構成員によって自由に選ばれた諸目標を「最善の方法」で、しかも最高の「効率性」

をもって満足させるための可能な手段を提供することを求めてきただけなのである。

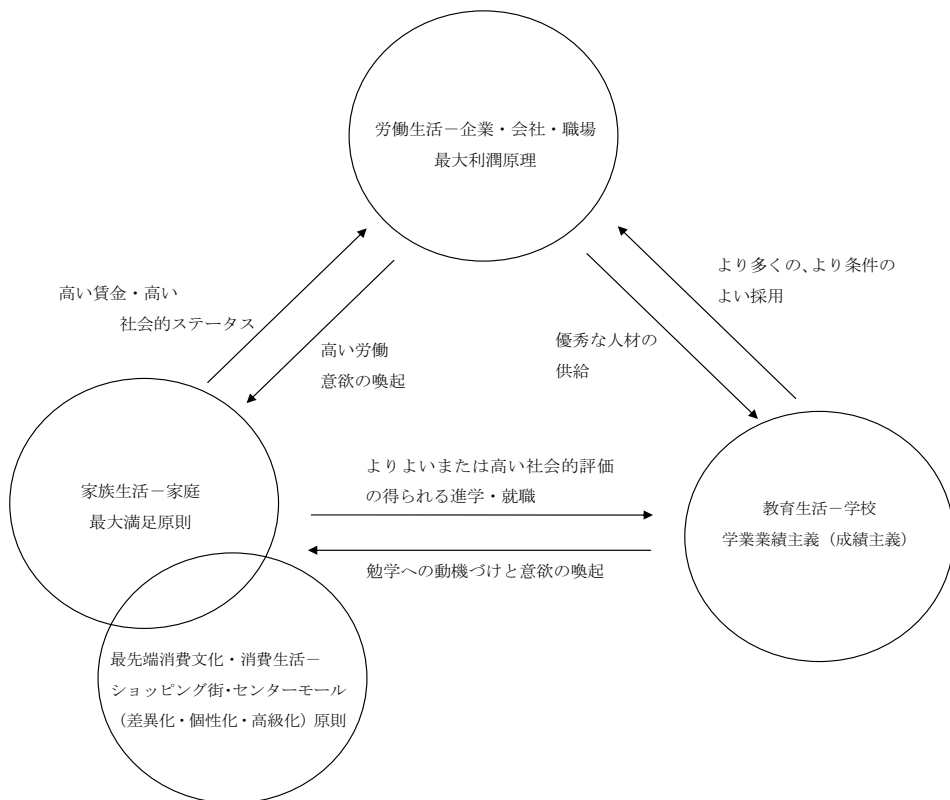
しかし、原理的にはそうであっても、同じくベル氏によれば、「新しい工業社会（市場経済社会）の新しい目標が何であるべきかは非常に明らかである—『所与』となっている目標はすべて財貨の物質的生産の増加にかかわるもの」⁽⁴⁷⁾〔（ ）内は引用者による〕であり、「他の伝統的生活様式（職人的熟練と技能、仕事場としての家庭の暖炉）（や他の生活目標—例えば感情コミュニケーションを人間的に最適化するような生活をおくりたいとか、穏やかで、豊かな精神生活を享受したいとかのような—を優先するような生活様式）はこれらの経済的目標の達成をめざす新体系の犠牲にされる」⁽⁴⁸⁾〔（や……）は引用者による〕のである。自分勝手に生活目標をたてることは自由だ。しかし、そのことによって経済生活が破綻しても、それは自分の責任だ。というのが、市場経済社会の真の現実なのである。そうした経済的淘汰のメカニズムを通じて、市場経済社会の構成員たちは、否応なく経済化生活様式の生活様式に適応していかなければならなくなるのである。ベル氏自身のことばで表現するならば、「この歴史はわかりきった陳腐なものかもしれないが、特殊な事実が強調されなければならない。（すなわちそれはパーソンズ氏のいうアノミーという性格を帯びており、）政治上の変化とは違い、だれもこの決定のための集団的な様式で『投票』していないし、だれもこの変化の結果を評価していない（もしくはできない）。しかし、功利主義的計算法もしくは経済化様式に基礎を置く全く新しい生活様式が、徐々に社会全体を變形し」⁽⁴⁹⁾〔（すなわち……）は、引用者による〕つけてきたのである。

では、かかる市場経済社会における経済化生活様式を基軸とする社会変動の推進力はどの生活領域、どのような社会組織または諸個人から生み出されているのであろうか。経済化生活様式を推進している諸個人については、すでに言及してきたように、ベル氏によれば、エコノミストと技術者であった。ここで再度ベル氏自身のことばでそれを確認しておくならば、「経済生活の新領域を革新する人物として……現代社会学理論の多くは経営者（manager）をルーチン化された経営を動かしていく顔のないテクノクラートとして取り扱っている。しかし、企業を理解するためには、企業家（および彼についての神話）や経営者（そして彼について描写されている戯画）を注視してはならない。むしろ歴史的にも社会的にもこの両者の仲介者である一つの存在—組織者（organizer）（すなわちエコノミストと技術者）を注視する必要がある」⁽⁵⁰⁾〔（すなわち……）は、引用者による〕のである。

ベル氏によれば、企業とは、市場経済社会の新しい社会的発明である。すなわち、市場経済社会における経済化生活様式の中核原理の一つである「生産性是一个の技術であり、財貨の生産が絶えず増大することは一个の目標である。この二つが実現されるためには、これらがある更新可能な機構体系のうちに組織化される必要がある。この組織が企業である」⁽⁵¹⁾。そして、「教会と軍隊は組織的生活の歴史的モデルとして存在し続けてきた。二〇世紀の最初の十数年間に現在の形態をとった法人企業は、これらの歴史的形態につけ加えられるべき一个の新しい

社会的発明であった。その形態を創造した人々—ATT をまとめたシオドア・N・ベイル (Theodore N. Vail), スタンダード・オイル・オブ・ニュージャージーのウォルター・ティーグル (Walter Teagle), ゼネラル・モーターズのアルフレッド・P スローン (Alfred P. Sloan) —は、最小の費用で資本投下に対して可能な最大の収益をもたらす一つの手段を企画した。そしてその手段は財貨とサービスの生産のために、人間、資財および市場を統合調整するものであった。彼らは機能的合理性の概念、《経済化》の概念を社会関係調整のための新しい様式として導入することによってそれに成功した⁽⁵²⁾のであった。

まさしく、市場経済社会においては、企業こそ、「組織的生活の歴史的モデル」となり、他の生活諸領域における（学校や家族というような）「組織的生活」のあり方に大きな、より正確な言い方をするならば、規定的な影響を及ぼしている存在なのである。市場経済社会における経済化生活様式の下では、「極大満足原理」によって行動している家族や（建前としては非営利的な公益法人であり、自己目的的に利益を追求しないことになっているが、）現実には企業と同じように「極大利潤原理」によって行動せざるをえない学校は、企業の組織形成原理・生活行動原理に適応しなければならないのである。そうした市場経済社会の経済化生活様式の



図一 1 （市場）経済化生活様式下における社会的生活諸領域の関係構造図

下における社会生活諸領域間の、企業を中軸とした関係構造を示したものが、図－1である。

以上で、感情コミュニケーション論の視点によって現代日本社会の現状分析をするための基礎的諸検討を終えたいま、いよいよ、次に、現状分析それ自体を進めることにしよう。その順は、人間存在のライフサイクル論的視点からいえば、人が生まれ育つ社会集団である家族、労働生活にはいる準備教育・訓練を行っている学校、学校教育終了後に入っていく労働生活とその場である企業（ここでは労働生活の場を企業に代表させている、以下同じ方針を採りたい）、そして労働生活によって得た賃金によって営まれる消費生活という順になるであろう。しかし、本論では、市場経済社会における社会生活諸領域間の上述のような関連構造の特質を踏まえ、消費生活→企業における労働生活→学校における教授・学習生活（以下教育生活と表記する）→家族生活という順で検討を進めることにしようと思う。

註

- (1) Antony Sterens and John Price, *Evolutionary Psychiatry—A new beginning*, Routledge, 1996, p. 28.
- (2) 山極寿一「身体の世紀」(『世界思想31号』世界思想社, 2004年所収), 43頁。
- (3) アダム・スミス『諸国民の富 I, II』大内兵衛・松川七郎訳, 岩波書店, 1969年, 1113頁。
- (4) ニコラス・レグシュ『あなたがキレる瞬間—ヒトはなぜ暴力をふるうのか—』荒本文枝, 柏書房, 1997年, 238頁。
- (5) 同上。
- (6) 同上。
- (7) 同上, 238～239頁。
- (8) 同上, 239頁。
- (9) 朝日新聞(1998年9月5日付)記事。
- (10) 同上。
- (11) 同上。
- (12) このような適応が私たちの行動・行為様式にどのような影響を与えるのかについては、資本主義的生産様式下の労働過程における疎外の問題として取り上げられ、論じられてきた。例えば、チャップリン氏の映画「モダンタイムス」などが有名である。
- (13) 社会的諸規範への適応への失敗・挫折による社会的行動・行為障害を取り上げた研究として、例えば、加藤まどか『拒食と過食の社会学』岩波書店, 2004年がある。この中で、加藤氏は、「自立」奨励規範と従順と女らしさを求める規範の、現代社会における女性をめぐる二重規範の罅の中に落ち、拒食・過食に走る女性たちの問題を取り上げ、社会学的分析を試みている。
- (14) 浅野義光・後藤文治『国民所得の知識』日経文庫, 1975年, 10頁。
- (15) 同上。
- (16) 同上。
- (17) マルクス『資本論4』資本論翻訳委員会訳, 新日本出版社, 1991年(12刷), 1224頁。
- (18) 同上。
- (19) 同上。
- (20) 浅野義光・後藤文治, 前掲書, 16頁。
- (21) アダム・スミス『諸国民の富(一)』大内兵衛・松川七郎訳, 岩波文庫, 1987年(32刷), 150頁。
- (22) 同上。
- (23) 同上, 151頁。
- (24) 同上, 156頁。
- (25) 同上, 155～156頁。

- (26) アダム・スミス『諸国民の富（四）』大内兵衛・松川七郎訳，1991年（20刷），142頁。
- (27) 同上，162頁。
- (28) 同上。
- (29) 同上，162～163頁。
- (30) カール・マルクス『経済学・哲学手稿』国民文庫，1974年（19刷），106頁。
- (31) 同上，107頁。
- (32) 同上，106頁。
- (33) 同上，107～109頁。
- (34) カール・マルクス『賃銀・価格および利潤』長谷部文雄訳，岩波文庫，1960年（37刷），62頁。
- (35) 同上，63頁。
- (36) カール・マルクス『賃労働と資本』村田陽一訳，国民文庫，1974年（35刷），30～32頁。
- (37) カール・マルクス・フリードリッヒ・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』花崎皋平，合同出版，1974年（12刷），56頁。
- (38) カール・マルクス，前掲『賃労働と資本』，13頁。
- (39) カール・マルクス，前掲『賃銀・価格および利潤』，60～61頁。引用に際しては，旧漢字を新漢字にあらためている。
- (40) カール・マルクス・フリードリッヒ・エンゲルス，前掲『ドイツ・イデオロギー』，56～57頁。
- (41) ここでの課題ではないが，人間社会の歴史的発展の諸前提に関するここまでの議論についての次のまとめは，マルクス氏の社会発展論を論じる上で重要な示唆をもっていると思われる。それを引用しておくならば，「これら社会的活動の三つの側面（物質的生活の生産，新しい要求の生産，そして人間の人間による生産・家族）は，三つのことなる段階と解されるべきものではなくて，歴史の出発点から，そして最初の人間たち以来，同時に存在し，今日でも歴史のうちで力をもっている，まさに三つの側面とのみ，あるいはドイツ人にはっきりわかるように書けば，三つの《契機》とのみ解されるべきものである」〔（ ）内は引用者による〕（同上，57頁）というのがそれである。
- (42) ダニエル・ベル『脱工業社会の到来（下）』内田忠夫ほか訳，ダイヤモンド社，1990年，358頁。
- (43) 同上。
- (44) 同上，359頁。
- (45) 同上。
- (46) 同上。
- (47) 同上。
- (48) 同上。
- (49) 同上。
- (50) 同上，360頁。
- (51) 同上。
- (52) 同上。

The Sociology of Emotional Communication and the Modern Societies (5)

UCHIDA, Tsukasa

One of features of our life style in the modern societies is that we live in the way of life in which reason is dissociated from the emotional life and is contrasted with it. And we have also given a big importance on reason, but on the other hand we have neglected an important significance of the emotional life.

In modern market societies in which we have lived, we have had to adapt ourselves to the rationalized social life in which the principles of modern rational and economized social life, like maximal profit by minimal cost, optimization, efficiency, and possibility of calculation, have been supreme ones. In such economized way of social life in the market societies, we have to treat the world outside us and ourselves as a means and instrumentally with the emotion (account) of profit and loss to attain ourselves ends, whether we wanted to or not.

In such social life, we have seen only intelligence as reason, but in the other hand, we have made emotions belong to the second and subordinate place, by seeing them as disturbing our rational activities and being irrational things. However, such very social life style seems to have suppressed our emotional life and have raised a lot of emotional problems that we don't know how to solve, not only in our individual minds but also in our social world.

I am going to analysis social conditions and our social life style which have raised such emotional problems, from the point of view of emotional communication in a series of articles. In this article, I intend to treat social changes and segmentation of the realms of human social life in the modern societies.

Keywords: emotional communication, sympathy, the emotion (or account) of profit and loss, suspicious communication, arrogance and resentment, love

(うちだ つかさ 本学人文学部教授 生活構造論専攻)